



英語授業で常に意識すべきこと

新里 眞男 (関西外国語大学教授)

英語教育では、発音・文法・語彙などの言語形式を中心にする指導と、意味や内容の理解や伝達を中心にする指導との間で振り子が振られてきた。これは、時代の流れとか要請だけの問題ではない。私たち英語教師はいずれかを得意とするためにそれを優先すべきと主張する傾向もある。いわゆる言語形式中心派と、内容中心派の二派である。この二派はそのまま accuracy 重視派と fluency 重視派につながっている。しかし、今の時代に求められるコミュニケーション能力の育成にとって、このように二派に分かれていてよいものだろうか。

言語コミュニケーションは、言語形式を使って意味内容を相手とやり取りする行為である。そこには絶えず言語形式と意味内容とがセットになって存在する。特に外国語である英語を学習する場合、この両者の密接な関係が学習者の中で成り立つことが必須である。そうであれば、授業が一方だけの指導に集中することはよくない。文法についての日本語による解説が指導の中心になったり、他方生徒がブロークンな英語で自己表現すればそれで十分としたりするのもしよくない。

授業中の活動には、言語形式の理解が中心、練習活動が中心、実際のコミュニケーション活動が中心などの段階があるが、そのいずれの段階でも言語形式と意味内容の“interaction”を念頭に置く必要がある。つまり、言語形式の理解・練習段階であっても常に意味を意識させ、英語でメッセージをつくり表現させることを考える。それにより言語形式の定着を図る。逆に、コミュニケーション中心の活動でも、生徒の発言に対し英語で feedback や recast などを返すことにより、コミュニケーションの流れはなるべく壊さずに、自然と言語形式への注意喚起を図る指導が必要である。

絶えず言語形式と意味内容の両方を意識して学習し、指導する。これは EFL の環境では逃げられない鉄則である。どちらか一方に偏ることができない「王道」である。“accuracy or fluency”という議論を超えた、日本人学習者の宿命であると思う。

「英語によるコミュニケーションでの見方・考え方を働かせる学習過程」への改善

—アクティブ・ラーニングの視点—



上原 景子（群馬大学教授）

1. 次期学習指導要領が求める学習過程の改善

中央教育審議会の答申第197号（平成28年12月21日、文部科学省HP参照、以下、答申と呼ぶ）は、次期学習指導要領の方向性の中に「主体的・対話的で深い学び」の実現を挙げている。これから生きるために必要な資質・能力を育成するには、習得すべき知識の量を減らさずに、「どのように学ぶか」の学習過程をアクティブ・ラーニングの視点で改善し、質の高いものにすべきであるとしている。文部科学省HPの用語集では、アクティブ・ラーニングを「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」と定義し、発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習、グループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワークを例に挙げている。答申は、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を軸として既に行っている学習活動をこの視点で改善していくこととし、「主体的・対話的で深い学び」は1つの授業で全て実現するのではなく、単元や題材のまとまりの中で実現すると述べている（答申概要参照）。

これらを受け、外国語教育では「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を働かせる学習過程へ、生徒が次の4つのプロセスを経ることを重視して改善することが求められている。(1) 設定されたコミュニケーションの目的・場面・状況等の理解、(2) 目的に応じて情報や意見等を発信するまでの方向性の決定とコミュニケーションの実施、(3) 対話的な学びとなる目的達成のための具体的なコミュニケーションの実施、(4) 言語面・内容面についての自分の学習のまとめと振り返り。こうしたプロセスは、学んだことが意味づけられ、生徒が既存の知識や経験と新しく得た知識を言語活動に

活かし、思考力・判断力・表現力を高める契機となる。

また、答申は、言語活動の展開と言語材料に関して教師が留意すべき次のことを挙げている。

①単なる繰り返し活動でなく、生徒が言語活動の目的や使用場면을意識して行えるように具体的な課題等を設定する、②設定した目的の達成のため、必要な言語材料（語彙や文法事項等）を取捨選択して活用できるようにする、③言語材料には、発達段階に応じて、生徒が受容するものと発信するものがあることを理解する、④小学校の学習内容（語彙・表現、文字の認識、語順の違い等への気付き）を言語活動で繰り返し活用し、生徒が自分の考え等を表現する際に話したり書いたりして使えるような段階まで確実に定着させる、⑤その際、具体的な課題等の設定など、意味のある文脈の中でのコミュニケーションを通して繰り返し触れ活用できるようにする。

中学校での改善・充実として、⑤に加え、生徒に身近なコミュニケーション場면을設定し、学習した語彙や表現等を実際に活用する活動を充実させること、高校との接続の観点から英語で授業を行うことを基本とすることも挙げられている。

また、領域別の目標は、小・中・高一貫の目標実現のため、これまでの「聞く」「読む」「話す」「書く」の4技能ではなく、CEFRを参考に、国としては「聞く」「読む」「話す(やり取り)」「話す(発表)」「書く」の5領域のそれぞれで段階的に実現すべきことを設定するとしている。

2. アクティブ・ラーニングの視点での言語活動

文法訳読法等の古典的な教授法は、個々の形と意味の対応と機械的なエクササイズやドリルに収束していた。対照的に、アクティブ・ラーニングの視点での言語活動は、身近で具体的な場面で課題解決等の目的達成に向け、形・意味・使い方を実際の意思

疎通を通して習得する活動の連続である。効果的でない活動が個々の語彙や文法（特に新出事項）だけにこだわるのに対し、この視点での言語活動は、既習事項を巻き込んで新出事項の典型的な使用場面や働きを学習者に提示し、経験させていく。新出の語彙・文法事項の学習は、使用場面やその働きを実際に体験しながら習得するため、英語で意思疎通ができる範囲が徐々に広がっていく。

ここで、SUNSHINEを活用した例を考えてみよう。新出文型は、各セクションの冒頭にその働きが目標の形で明示され、対話形式のBasic Dialogが身近な場面・状況で提示されている。

現在進行形を扱う1年PROGRAM 9-3では、「今、何をしているのかについて、たずねられるようにしましょう。」という、相手の状況が見えない電話での対話という自然な場面設定で提示している。この設定を活かし、まず対話を聞かせて場面や状況を推測させたあとに形と意味を確認し、次にListen, Speak, Tryを活用して親しませる。そして、ペア活動等で電話をかけて相手の状況をたずね合う活動や、一緒に勉強したり遊んだりするために今していることをたずね合い、何かを一緒にする相手を見つけたり約束したりする等の活動を行う。これは、2年PROGRAM 2-1で扱うbe going toの言語活動につなげることもできる。例えば、今後の予定を聞き合って、何かを一緒にする約束をする活動に加え、今何をしているかをたずね合ったり、予定が合わない場合に今後の計画を立てたりする等の活動を行わせる。また、2-2の自分の気持ちや考え等を表すwillの働きや2-3の未来のことを表すwillの働きを合わせて天気の詳細等を組み込めば、予備の計画を決める活動にも発展できる。さらに、5-3のifを学習する時点では、いっそう具体的に「もし雨なら…」などと、計画を立てる活動につなげることもできる

し、3年のPROGRAM 2の「これまでの経験」の表現の学習時には、行ったことやしたこと経験からのお勧め等も含められる。

このように、新出言語材料の導入時には、生徒に身近なトピックや起こりそうなことから「一緒に何かする約束や計画」等の具体的な課題を設定して、既習事項も駆使しながら意思疎通を重ねる中で定着させたい。また、小学校での学習事項を*Hi, friends!*や実態調査から把握しておき、将来の夢や行きたい国等、生徒が既に慣れ親しんでいるものを活用し、やり取りや発表の活動の設定や範囲をより工夫したい。

教科書の本文は、まず生徒自身が聞いたり読んだりし、内容を推測・把握することから始めたい。例えば、2年PROGRAM 9-2では、武史のソフトテニスについての発表を聞かせ、概略を掴ませる。セクションにより会話・文章等さまざまなが、関連した身近な話題や活動で「話す(やり取り・発表)」と「書く」の機会を多数つくる。「武史になったら、自分のことについて発表しよう」等、言語の使用場面が多く設定できる。また、POWER-UPシリーズやReadingの課でも、まず英文の概略を掴ませ、内容確認後には感想や意見を述べ合う、話の続きをつくる等の対話的・協働的アウトプット活動を行う。巻末付録の英語で「できるようになったこと」リストも学年当初から活用し、生徒が自分の伸びや努力点を認識できるよう工夫したい。そして、授業冒頭の帯活動等で「生徒が既習事項を躊躇せず駆使する流暢さや即興力の育成」を心がけること、単元や授業の振り返りで「学習した言語材料の使用できる場面や働き、題材や言語活動での発見を生徒自身が整理・消化する機会を設けること」も非常に大切である。

言語能力を引き出すコミュニケーション活動（仕掛け）は教師の腕の見せ所？



秋山 朝康（文教大学教授）

1. 生徒の言語活動を引き出す仕掛けづくり

教師の腕の見せ所は授業のいたるところにある。最初のウォーミングアップから最後の授業のまとめまで教師の工夫次第で授業は変わる。生徒が英語を使う場面を多くつくり出すことも英語教師の腕の見せ所の1つである。しかし、コミュニケーション活動（仕掛け）をつくることはことばで言うほど簡単ではない。

次期学習指導要領のキーワードであるアクティブ・ラーニングを「生徒が対話を通じ主体的に学ぶこと」と定義することにする。英語教師の役割を「生徒が自ら考え、自分で伝えたいくなるような仕掛けづくりをすること」とするならば、これまでの教師の役割とあまり変わらないように思える。なぜなら、これまでの学習指導要領の主な目標は「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」であり、教師は、生徒がコミュニケーションを図れるように工夫を凝らし、サポーターになることであるので、そのような教員にとって今さらの感がある。ただ、学習指導要領にアクティブ・ラーニングの考え方を導入することは、「教師中心の授業とは決別するということを意味する」と私には感じられる。本稿では、SUNSHINE の内容を用いて生徒が積極的にコミュニケーションを図りたくなるような実践例（仕掛け）を紹介する。

2. 仕掛けづくりのキーワード

日本食をつくるときの料理の味つけの基本になる5つの調味料、「さしすせそ」がある。ここではアクティブ・ラーニングのコンセプトを生かし、コミュニケーション活動を促進するためのキーワードを紹介する。生徒のコミュニケーション活動を活性化するためのいくつか必要な要素である。ここではピク

ニック（PICNIC）を紹介する。

ピクニック（仕掛けづくりのキーワード）

P	purpose	目的がある
I	interesting	おもしろい、興味深い
C	context	状況、コンテキスト
N	need	生徒の必要性
I	interaction	インタラクション
C	cooperative	助け合ってつくる

コミュニケーションには目的がある。そのため、生徒にも目的を持たせて活動させることが大切である。また活動はおもしろくなくてはいけない。知的なものやゲーム性を持ったものなどどちらでもよい。どんな場面（コンテキスト）でのコミュニケーションなのかを生徒に意識させることが大切である。誰に対してどんな会話をするのか。それによりことばの使い方、ジェスチャー、声の大きさや調子などが決まる。どうせやるなら生徒のニーズを汲みとり、それを反映させたほうが生徒のテンションは上がる。インタラクションを通じてコミュニケーションの目的を達成し、できることならペアやグループで助け合って何かを達成できる活動がよい。クラスはきっと盛り上がるだろう。

3. SUNSHINE 2 PROGRAM 2(pp.18-19)

今回はPROGRAM 2（A Trip to Finland）を題材にコミュニケーション活動を活発にする仕掛けをつくる。この単元はbe going toが文法項目で予定や計画について言えるようになることが目標である。本文では興奮気味に由紀が来月フィンランドへ行く予定であることをマイクに伝えて、マイクはどれくらいフィンランドに滞在するのか由紀に質問している。

上記の言語材料のほかに生徒がスキル別にbe going toを学習するように書かれている。Listen では6つの英文を聞いて過去、現在、未来の区別が

できるか、Speak は絵を見ながらいつどのようなことをする予定なのか話すよう工夫がされている。そしてWrite は「次の日曜日何をする予定なのか」について英問英答するような練習がついている。つまりこの単元では「～する予定である」をさまざまな場面に応じて使えるようになっている。

4. 仕掛けづくりの実例

さきほどのPICNICを用いて、「予定や計画について言えるようにしよう」の仕掛けをつくっていく。

ツアープランナーコンペ

P	旅行プランナーになってツアーを企画する。
I	クラスメートとツアーのプレゼン競争をする。
C	訪日外国人観光客の目の前でプレゼンテーションをする。
N	訪日観光客に自分が考えたツアーの内容を説明する。
I	企画を発表する際に、聞いている人とQ & Aをする。
C	ペアやグループになって協同してツアープランを作成する。

ここでは、授業で実際にツアープランを作成する場合のいくつか可能性のある条件設定（考慮すべきこと）を記す。

(1) 紹介したい場所を決める場合

自分の住んでいる町に限定するのか、穴場の場所を指定するのかなど。生徒が場所を選択するときに制限をつけるかつけないか。

(2) ツアー時間の制限

例えば、ツアーは9時から始めること、12～13時まではランチ（何を食べるかを書く）とすることや、遅くとも18時には終えることなど。

(3) 生徒にサンプルを渡すかどうか

ネットには見本となるようなものがたくさんあるので、生徒にサンプルとして渡すと時間を短縮できる。

(4) ツアーにどこまで具体性を持たせるか

どのような交通手段を使用するのか、どれくらい費用を払ってもらうのか（ドルにするのか円にする

のか）など、選択の余地は無数にあるであろう。

(5) 4技能について意識する

この活動のメインはライティングであるものの、ツアーのコースを考える場合、社会（地理・歴史）や情報（英語で書かれたサンプルなど）を読みとるという意味ではリーディングも含んでいる。このように技能統合（ここではWritingとReading）することを意識すると、より本物のコミュニケーション活動に近づくことを忘れずにいたい。

5. 活動および評価するときに考慮すべき点

このような活動を考えるときには、生徒と一緒に考えることを勧める。生徒はときに教師が思いもつかないようなよいアイデアを提供してくれる。できる限り生徒の考えを取り入れたい。生徒が自分たちの活動ということで、より積極的になる可能性が高い。つまり生徒の関与を増やすことが秘訣である。

次に評価する場合に考えられる必要な点を簡単に述べる。

- ・どのような波及効果をねらうのかで評価項目を決める（どの点を生徒に頑張ってほしいのか）。例えば、声の大きさ、間違えても積極的に話そうとする態度、または、ある特定の発音やキーフレーズを身につけさせたいのかなど。
- ・生徒に評価の方法をあらかじめ伝える。
- ・実際に評価者（コメンテーター）になってもらう。

Peer assessment の利用。

- ・放課後などを利用してテストのリハーサルをする。

英語科の先生方で授業が活気づくような活動をつくり、シェアできるようにオリジナルのアクティブ・ラーニング集を作成されてはいかかだろうか。

生徒を育てる実践

—生徒の目線で体験し教師の目線でデザインする—



楠本 正義 (札幌市立栄南中学校教諭)

1. はじめに

全ての生徒を笑顔に。自分自身をはるかに超える人材に育ててみせると決めて、先哲の英知と希望が込められた教科書を手にとる。生徒が育つ喜びと、ともに学び、ともに笑う授業がアクティブ・ラーニングだと思う。主体的、協働、課題解決、学び方を学ぶ、などいくつかのキーワードを今一度意識したい。新しいものなど皆無な拙い実践ではあるが、皆さまと共有し、助言をおおぎながら、目の前の生徒のために精進したい。

2. 授業実践 (SUNSHINE 1 PROGRAM 7-1)

(1) 導入、出会いは閉本スタート

A: What is that? Is that *cha-han*?

B: No, it's not. It's like *cha-han*, but it's *biryani*.

A: I see. Who is that? Is he Mokomichi?

B: No, he isn't. He's like Mokomichi, but he is my teacher Kusumoto.

A: I see.

教科書本文に入る前に、新出事項が使われる場面、その意味、そして form をクラスで理解させるため、グループで上記のような対話実践をさせる。その実践法とポイントをまとめた。

- ☐ A, B 役は積極的に生徒を起用
- ☐ 意味や場面を理解させるためのシンプルな構成
- ☐ スキットやプレゼンで、視覚や聴覚に訴える
- ☐ 既習と新出がくっきり対比されるように
- ☐ ユーモアを忘れずに
- ☐ 文字を見せずに音声でのアプローチをくり返す
- ☐ 生徒の気づきを引き出す発問、対話的に
- ☐ グループで話し合い、誰も置いていかない
- ☐ 最後の A のセリフはグループで考え、英語力以外のよさも引き出す

(2) 練習

form に慣れさせるというミニゴールに向かってスピーキングドリルをする。

- ☐ 視覚的な助けを用いて
- ☐ 何度もくり返し行う (= ドリル)
- ☐ 回数の指示は指のサインで
- ☐ 指名をして練習させるなど緊張感を持たせる

(3) Basic Dialog

1年生のうちは、私は教科書の Listen と同様にリスニングでもここを用いる。Listen との扱いの違いは、いくつかある。

- ☐ 閉本したまま聞かせる
- ☐ どんな内容か個人で考えてからペアで考えさせる
- ☐ ペアで会話の続きを一言、二言考えさせ演じて発表
- ☐ ノートに自己表現として書かせる (自由課題)

(4) Speak

新出事項を用いて話す、聞く活動をすることに意味がある。いかに聞か、反応するか、報告するかも組み込んでいくと楽しい。まずペアになり、A が写真を指さしてたずねるところから活動を始めて、広げ深めていく。

- ☐ ペア活動の組み合わせ方は、4 パターンほど
- ☐ ペアワーク 1, 2, 3, 4 と示すだけで、生徒が動く
- ☐ B が写真の人物について名前を答え、その後、何をした人なのか、なぜ紙幣に載っているのかペア討議

(5) Try

実際の英語使用場面により近い活動、生徒がよりよい集団になるために必要なコミュニケーション活動をイメージし、進める。

- ☐ ペア活動からスタート
- ☐ 時間で区切ってペアチェンジ
- ☐ クラスにいる友だちのクイズもつくらせる

「先生、寝ぐせって英語で何て言うんですか。あとボブって髪型もそのまま言っているんですか。」と生徒から質問が出始めたので、個人、ペア、グループで話し合わせることに。職員室かほかのクラスまで行き、ALT に質問する生徒を選抜。辞書もありだったが、手間をかけて一緒に ALT のところへ。その選抜生徒と教室に戻ると、みんな興味津々。「He has bedhead.” だって!」と黒板に書きながら彼らが報告すると、みんなペンを走らせてメモ。次々に使い出した。

- ☐ 教師はあらかじめ ALT に授業の方針について伝えておく
- ☐ 次の授業始めに自由発表を設定
- ☐ ノートに自己表現の自由課題で友だちや家族などのクイズを書かせる

(6) 本文題材への関心を高める

音から入る、概要を伝えるためのオーラルイントロなどの基本をおさえながら私自身が意識しているのは、ワクワク感だ。

PROGRAM 5 では自身の突撃英語食レポ (インド料理)、PROGRAM 7 では笹森琴絵さんの動画と壁一面に描いた大きいシャチの絵を見せた。PROGRAM 9 では元旦に何をするかペアで話し合わせてからリポーティングをさせ、忙しさや臨場感を大事にした。

(7) 語彙

- 辞書は授業 3 回のうち一度は使う場面を設ける。
- ☐ 集団の診断が最初。フラッシュカードの英語を最初に読むのは生徒
- ☐ 単語の最初の文字を見せて読ませて音韻意識 (PROGRAM 7-1 では w と h)
- ☐ 派生語、反意語、似たような語などは「調べ学習」 (PROGRAM 7-1 では ocean と sea の使い分け、気になる海洋生物)

(8) 音読活動後のプロダクション

英語の表現力をより伸ばすため、音読だけでなく、リテリングも行っている。内容を伝えるだけでなく、聴衆の生徒に質問をするインタラクションを入れるとさらに盛り上がる。

- ☐ 教科どおりのノーマスでスタンプ 4 つ
- ☐ 2 文以上オリジナルが入れば 5 つ

生徒は、この発表でスタンプを 5 つもらうことに特に大きな喜びを持っている。

(9) ノート

ノートは一元化し、授業と矛盾しない指導をする。ノート提出の際にはスタンプをカウントし、小テストで日づけや天気、曜日も正しく書けばボーナススタンプを押すようにすると、生徒は進んで練習する。スタンプ数は、PROGRAM ごとに数えているので、生徒は評価も意識して発表などにも取り組むことになる。

- ☐ 自己表現、調べ学習のページを設ける
- ☐ 量を書かせる指導は、ノートの後ろから
- ☐ 全てのコーナーがスタンプをもらえる対象
- ☐ 予習はさせない、復習を中心に

3. おわりに

PROGRAM 10 の過去形の導入では、like, don't like, liked を用いてバレンタインデーでの対話を生徒と一緒に考えた。教員がつくりすぎず、生徒の創造性を発揮させる余裕を大切にしていきたい。

「発話力」を鍛える ための視点とスキル・ トレーニングの必要性

中嶋 洋一（関西外国語大学教授）



1. 指導の基本は「内容+英語」

SUNSHINE ENGLISH COURSE の主幹、新里眞男氏（関西外大）の研究室にお邪魔して話をしていると、話題はいつも「内容と英語を絡めた指導のあり方」や「話す力をどう高めるか」に行き着く。共通の関心事なのである。そこで、最初の小見出しを「内容+英語」とさせていただいた。「英語+内容」の順序ではないことに留意していただきたい。英語を学ぶために「内容」があるのではなく、あくまでも、内容を理解し、自分の考えや意見を表現する手段として「英語」を使う。それがことばの「必然性」である。

本稿では、「発話力をどう高めるか」というテーマで論を進めていくが、紙幅の関係で「具体的な指導」は紹介できそうにない。だが、読者の関心はまさにそこにあると思うので、その内容（「話す力」を伸ばすスキル・トレーニング・アラカルト）を開隆堂の HP（本稿の最後に URL）に載せていただくことにした。実際に筆者が中学校でやっていたことであり、一定期間続ければ、間違いなく生徒が変わるだろう。その一部を簡単にご紹介しておく。

- (1) Recast で「発話力」を高める
- (2) 2 つのマッピングで話せるようになる
- (3) 新出単語は、実際に自分で使うほうが定着しやすい
- (4) 「演読」や「Retention, Reproduction」で話すイメージをつくる
- (5) 即興で英語が話せるようになる下地をつくる
- (6) 高速の和文英訳で話す力を鍛える

2. 「内容」を深めるために

コミュニケーション能力とは、自分を表現し、他者を受け入れる力のことである。ならば、言語の習得を目的とした系統的な「スキル・トレーニング」を課し、他者と関わり合う場面を意図的につくっていけば、コミュニケーション重視の授業にできる。

逆に、場面のない文法の説明、パタン・プラクティスの域を出ない言語活動、一問一答式の問いかけでは、コミュニケーション能力は培われない。

特に、「話す活動」で配慮したいのは、教科書の一部を変えただけの表現活動（借り物の英語）で終わってはいけないということである。最後はオリジナル（自分の考え）で出力させる。そうでなければ、即興で話すことなど夢のまた夢である。

大切なのは教師の指導方針である。新里氏は、「内容+英語」を可能にするために、次の 3 つの指導を勧めるが、まさに同感である。

- ①「最初から英語で」と欲張らずに、徐々に英語を増やしていくようにする。「英語では…」と言って、生徒が言えない部分を補足してやる。
- ②内容を深めるときは、Why と How で「自分の考えや意見」を引き出すような発問を心がける。
- ③教科書の本文から発展した情報を与え、“What do you think? Do you agree? Why?” と問いかけ、意見を持たせる。“What do you need? For example?” と具体を求めることもできる。なかなか言えない生徒には、キーワードをヒントとして与えるようにする。

このように、教師のゴールは、英語を英語のまま理解できるように「言語環境」を整え、生徒を揺さぶる発問や質の高い問いかけをして「内容を深める」ことである。それにより、生徒のコミュニケーション能力も高まっていく。

3. 子どもが生き生きと英語で語るイメージを

まず、教師自身が、英語を話している生徒の具体的なイメージを頭に描けるようになりたい。全国で、その具体をお見せすると、誰もが衝撃を受けられる

ようだ。しかし、そのようなイメージを持たないまま日々の指導をしているとなると、いささか問題ではないだろうか。

映像でないのが残念だが、いくつかその具体を紹介するので、想像して見ていただきたい。

◆大阪の寝屋川市では、中学生がパワーポイントを使って写真や映像を見せながら、語り部のように聴衆に語りかける。スライドは全て自作なので、頭の中に全体のイメージができており、さらに写真が言いたいことの reminder になっている。

こうすると、通常のスピーチと違い、暗記の負担と忘却の恐怖がなく、主体的に練習に取り組む。聞いてほしいという気持ちになるからだ。だから、どのプレゼンも見事の一語に尽きる。全国教育委員会、熱心な小学校・中学校の先生が、毎年、会場に足を運んでいる。

◆全英連山口大会（2016.11.11）で行われた公開授業では、高次のプレゼンテーションやインタラクショが見られた。終わったあと、隣席の向後秀明文部科学省教科調査官が「突き抜けてすごい!」と感嘆しておられた。指導のプロセスを聞くと、毎時間、スキル・トレーニングを系統的に行っていたことがわかった。

◆東広島市で行われた中学校・高等学校の研究発表会では、中学生が生き生きと即興のチャットを楽しんでいた。1 年では基本文や Q&A を徹底し、2 年では場面や条件で考えるチャットを、3 年では 2 ～ 3 分の即興のチャットやディベートができるように、教科部会が一枚岩になって指導を展開している。

◆茨城県では、Interactive English Forum（初対面の 3 人がその場で出されたテーマについて即興で 3 分間会話を続ける）がゴールとなっている。

いくつかの映像を見る限り、どの生徒も臆せず、少々間違いなど気にせず、脈絡を考えながらつなげている。これは、英語を正しく「理解」しているからできることだ。母語も含めて論理的に思考する訓練、舌や歯の位置を意識した発音指導、まとまっ

た内容を書く、話すという活動を仕組むなど、「本気」で取り組まないとこのような生徒は育たないだろう。

さて、これらの事例から何が学べるだろうか。それは、生徒ができないのではなく、教師の指導次第で「身近なことを話す」「情報の交換」「問題解決に向けた交渉」もできるようになるということだ。可能にしたのは「話せるようにしてやりたい」という教師たちの強い熱意である。

何事も、このように「大枠（マクロ）」から「細部（ミクロ）」の順、授業でいうなら「育てたい生徒、そのための指導」という順序で考えていくことが大事だろう。英語で言うなら Begin with the end in mind. である。車のカーナビも、いきなり詳細モードにはしない。広域モードでマクロ（全体図）を俯瞰し、イメージを持ってから、ミクロに入っていく。料理も同じ。全体の仕上がりのイメージが最初に持てなければ、具材の準備（段取り）や時間の設定はできない。その結果、できあがった料理は無残なものになる。

4. 授業は「生き物」である

筆者の経験から、声を大にして言いたいのは「自己表現（こだわり）+他者評価（他との関わり）」の活動を仕組むことの重要性である。

児童・生徒たちは、こだわりが生まれれば、よりよいものにするために「論理的に思考」し、「目的を持った発言をする」ようになる。その瞬間、授業に命が吹き込まれたように感じる。

また、年に数回行う「飛び込み授業」から、授業は「付け焼き刃でどうにかなるものではない」ということを痛感する。目の前の「育てられた生徒」に対して、活動の選択肢は自ずと決まってくる。授業は、野菜づくりや稲作と同じで、育てる側の理念（育った姿を知る）と指導（手間ひまをかけられるか）次第なのである。

★特別編（具体的指導例）は、開隆堂 HP <http://www.kairyudo.co.jp/> より、「中学校」→「情報誌」→「英語教育」からご覧ください。

話す活動における 留意事項

— 今一度確認しておきたいこと —

若有 保彦 (秋田大学教育文化学部准教授)



1. はじめに

本稿では、話す活動で重要と思われるポイントのうち、「発表」(Spoken Production)と「やり取り」(Spoken Interaction)の両方に共通すること、また特に発表で留意すべき点について、これまでの授業参観の経験から思うところを述べたい。

2. 発表とやり取りに共通するポイント

発表でもやり取りでも、特定の相手とのコミュニケーションで最も重要なポイントは、聞き手を意識することだと思う。では、聞き手を意識するうえで必要なことは何か。当然だが、まずは相手をちゃんと見て、反応を確認しながら話すことだろう。

しかし、この当然のことが英語授業ではなかなか徹底されていない。授業参観では、聞き手のほうをほとんど見ず、スピーチの原稿や会話例を示した紙を読み上げるだけの生徒の姿をよく見かける。いくら教師が「紙を見ないで」と指示しても、見なければ発表ややり取りは進まない。結果、どうしても紙に視線が固定されてしまう。

この状況を改善するうえで当面カギになるのは、Read and Look-up (and Say)の活動だろう。教科書の音読を行う際や、紙に示された例をもとに会話練習を行う際は、話す際に一旦文字から目を離し、相手を見る。まずはこの習慣を身につけさせたい。

発表とやり取りに共通するもうひとつの重要なポイントは、聞き手の育成である。いくら話し手が聞き手を見るようになって、聞き手が顔を上げなければ理解の確認は難しい。放送などの場合を除き、コミュニケーションの成立には双方の歩み寄りが不

可欠であること、話し手の頑張りに聞き手は視線や表情、頷きで応える義務があることを生徒に理解させたい。

3. 発表のポイント(1): 充実感を持たせること

ある程度長さのある(=内容にまとまりのある)ものを発表させる際に最も意識すべきことは、生徒に「やってよかった」「またやってもいいかな」という充実感を与えることだと思う。痛い失敗に奮起する生徒もいるかもしれないが、多くの生徒は苦痛に感じたことをまたやりたいとは思わない。少なくとも、教師の配慮不足で発表を失敗に追い込むことがないようにしたい。

では、発表の充実感を得られるのはどういうときか。それは、自分の発表が理解され、他人の考えを深める役に立ったり、パフォーマンスへの自信や課題が得られたときだと思う。拍手や“Good”の一言しかもらえない発表に、生徒は「努力が報われた」と感じるだろうか。聞いて理解できたのが教師だけという発表は、生徒にとって意味のある活動と言えるだろうか。やはり発表してもらった以上は何らかのフィードバックを与えたり、質疑応答を通じて聞き手とシェアを行うなど、発表者に「努力が報われた」と感じてもらえるようにしたい。

発表に充実感を覚えさせるには、クラスの雰囲気も大切である。もし生徒の人間関係が未成熟だったり、発表に集中できないような雰囲気の場合には、(全体の前でのSpeakingによる発表にこだわらず)書かせた原稿を黒板や壁に貼り、次の授業までに目を通しておくよう指示することも考えられる。こちらのほうが時間の節約になるし、より多くの情報を収集できる。

4. 発表のポイント(2): 失敗を避ける手立て

それでもやはりクラス全体の前でSpeakingによる発表をさせたい場合、どのような配慮をしたらよいか。発表が「失敗」(本稿では「紙の読み上げ」

と定義する)に終わらないよう、最初の段階では以下の手立てを検討してもよいと思う。

- ①発表前に話す練習の機会を与える
- ②発表時に絵やキーワードなどのキューを与える
- ③次の発表者は準備に専念させる
- ④発表者と聞き手を互いの顔が見える配置にする

①は、クラス全体への発表前に、各自で練習したり、ペアや4人グループの前で練習したりする機会を与えることである。授業参観では、グループで議論した内容を準備時間なしで全体に向けて発表することを求め、その要求に生徒が応えられない場面をよく見かける。この場合「失敗」の原因は生徒にあると言えるだろうか。

もし発表を次時にまわし、授業前に練習しておくよう指示した場合でも、慣れていない段階では直前にも練習の機会を与えたほうがよい。生徒は発表にこちらの想像以上の重圧を感じる人が多い。

②は、発表の際に内容を思い出す手がかりとなるものを利用することである。この際の手がかりは、絵やキーワードなど、見ただけで何を言えばよいか思い出せるもののほうがよい。特にキーワードの場合は、助けになりそうな語句を生徒各自で選ばせて書かせることも考えられる。

なお「紙を見ないで発表」という指示を与える教師ときどき見かけるが、慣れていない場合は避けたほうがよい。我々教師で言えば、授業検討会で「小グループで話し合った内容をメモなしで英語で発表せよ」と要求されるようなものだろう。このタスクは相当な英語力があっても厳しいはずだ。

③は、次に発表する個人やグループを「聞き手」に含めず、発表準備に集中させることである。次に発表が回ってくる状況で聞くことに集中できる生徒はまずいない。また発表に慣れていない段階では、突然指名して発表させるのも避けたほうがよい。発表の重圧の中で聞くことに集中するのは難しい。意

味のある質問やコメントをすることは容易ではない。

④は、発表の際に、発表者と聞き手双方を互いの顔が見える位置に座らせることである。授業参観ではグループ活動の座席配置のまま発表させる場面をよく見かけるが、聞き手の顔が見えなければ、発表者は相手を意識しづらくなる。また発表者の顔が見えなければ聞き手も反応することは難しい。時間の関係で机の移動が難しい場合、せめて椅子は発表者のほうに向けさせるくらいの指示をしたい。

5. おわりに

個人的な見解だが、発表ややり取りにおいて聞き手に意識を向けない「紙の読み上げ」は、教科書の音読と同じようなもので、コミュニケーション活動というより練習活動に位置づけたほうがよい。これを「発表」と称することで、話し手も聞き手も(そして教師も)不完全燃焼の状態に陥っているように思える。また、紙ばかり見ないことは大事だが、かと言って丸暗記をすればいいわけでもない。というのも、意識が聞き手に向いていない(=記憶の再生に向いている)点では、丸暗記も「紙の読み上げ」と大差ないからである。もし暗記という練習方法を採用するのであれば、発表が気持ちのこもった「自分のことば」になるまで徹底的に練習させたほうがよい。気持ちのこもらない、「自分のことば」でない発表から意味のある質疑応答は期待できない。

本稿で述べたポイントは、いずれもどこかで目や耳にしたことばかりで、特に新鮮味はないだろう。しかし、どんなに先進的な取り組みも「相手を意識する」というコミュニケーションの基本が欠けていては、話す能力の向上を期待することは難しい。本稿でそれを思い出していただければ幸いである。



朝の会を活用した英語実践活動！

佐藤 裕子（千葉県船橋市立若松小学校教諭）

1. はじめに

国際化の中で、コミュニケーション手段としての外国語の重要性が高まっている。しかしながら、小学校で確保されている授業時数は限られている。そこで子どもたちが自信を持って自分の気持ちを表現できるように、1年生から毎日、健康観察や朝の会・帰りの会で、クラスルームイングリッシュを活用した英語活動を試みた。

2. 実践内容

授業は毎週1回20分であるが、クラスルームイングリッシュを毎日朝の会・帰りの会で活用すると、各10分×2×5日で100分英語に触れる時間を生み出すことができる。毎日継続して英語に触れることが大切であると考え。以下の3つをクラスルームイングリッシュ活用のもと設定し、継続して実施する。

活用1…健康観察

担任が毎日行っている健康観察を英語で行う。

活用2…朝の会・帰りの会

朝の会・帰りの会の進行を英語で行う。

活用3…1分間スピーチ

朝の会で実施している1分間スピーチを学習段階に合わせて英語で行う。

学習段階に合わせて取り組みの時期を決定する。入学して学校生活に慣れた6月から、英語での健康観察・1分間スピーチを開始する。9月から英語での朝の会、10月から帰りの会を開始する。クラスルームイングリッシュ活用の実際として、今回は「健康観察」についてくわしく紹介する。

日本語では「〇〇くん」「〇〇さん」と呼ぶが、英語ではファーストネームで呼ぶ。必ず目と目を合わせて返事をするようにする。

日本語のときは「〇〇くん」「はい、元気です」と返事をしながら手を挙げるが、英語のときは“〇〇！”“Here, I’m OK.”と返事をしながら手を挙げる。日本語での健康観察に慣れた6月から始めた。返事の仕方を2、3回練習すると、皆すぐにできるようになった。上手にできたら“Very good!”や“Excellent!”などと大げさに褒めるようにした。体調がふつうなら“Here, I’m OK.”、まあまあなら“Here, I’m good!”、調子がよければ“Here, I’m great!”と自分の体調によって返事の仕方を変えてよいと伝えると、ほとんどの児童がいろいろな言い方で返事をするようになった。しばらくすると、「足を怪我しているときや、のどが痛いときは何て言うの？」などの質問が出てきた。自分の言いたいことや気持ちを伝えたいという様子が見られた。最初は日本語での健康観察で声の小さかった児童が、英語での健康観察になったら大きな声でできるようになり、うれしい発見である。この活動を通して、次の3つのことが達成できた。

- ① 英語の音声やリズムに慣れ親しませること。
- ② 外国と日本では名前の呼び方が違うことに気づくこと。
- ③ 「風邪をひいている」など、自分の言いたいことや伝えたい気持ちを持つこと。

3. おわりに

クラスルームイングリッシュは、子どもの実態をいちばん間近で捉えている担任ならではの工夫が活かされる場面である。コミュニケーション能力の素地を育むために、子どもの実態や学習段階を捉えながら、クラスルームイングリッシュを活用した授業づくりや組織体制を工夫していくことで、中学校の英語につなげていくことができると考える。



学びをつなげ 高めたい生徒の力

小林 明子（茨城県水戸市立緑岡中学校教諭）

県の英語教員リーダー育成事業であるハワイ大学研修に、その初年度参加する機会を得た。指導技術への気づきはもちろん、学び手が主体となり活動する時間の多さにハッとさせられた。研修後2年間は、指導技術普及のため、専門指導員として所属校と小学校推進校で公開授業を行った。当時は外国語活動の指導経験もなかったため、本を読んだり推進校で話し合いを重ねたりしたことは、外国語活動への理解を深めるよい機会となった。

2016年度は1学年を担当している。小学校との系統性や継続性を考慮し、生徒主体の活動時間の確保を心がけている。そして、中学校では何ができるかといかを明確にし、段階的かつ継続的に指導することで、過度の負担感を与えず、生徒が学習の成果を実感しながら、英語でできることを増やしていきたいと考えている。

1. 外国語活動のやり取りをより豊かに～帯活動

(1) Card Exchange（1学期）

友だちに自分の持つカードについて質問をする。質問は小学校での学びをベースに、イラストと文字で示してい



る。一問一答で終えず、I see. などの簡単なリアクションを返すことを課題とした。対話後、互いのカードを交換する。質問の種類によりカードは色が異なり、別の色の友だちのところへ行くことで、多様なやり取りができるように配慮した。

(2) Topic Talking + Writing（2学期～）

与えられたTopicについて、教師と生徒のインタラクション後、ペアで1分間の対話をする。(1)同様、応答にはコメントを加える。さらに、エコーやリアクションなどのコミュニケーション方略も学習し、相手の発言に反応を示しながら対話を継続させる。「友だちからリアクションをもらえると、話し

ていて楽しいし、相手のこともよくわかる」など、やり取りに流れが生まれ、対話が豊かなものになることを実感する生徒も多い。

また、そのあとにWritingの時間を設け、少しずつ書く力を高めることも目指している。3単元の学習前は自分のことを、学習後は友だちのことも含め、対話で伝え合ったことを英文にして報告する。

2. 新出の言語材料を活動の中で～現在進行形編

ペア対ペアの4人グループでPicture Describingを行った。1枚の絵について、各ペアに半分ずつ情報を与える。



パートナーと協力しながら、自分たちの持つ情報をグループで伝え合い、絵全体の情報を完成する。活動を振り返り、「be動詞が抜ける」など、自分たちのエラーに気づく生徒もいた。

3. 次の学びへ～振り返りカード

Performance Testを通して、学習の成果を確認し、VTR視聴や教師からのコメントによりフィードバックをする。だが、普段の授業の中で、自らの学びを振り返る力が身に付いていけば、学びはもっと深いものになっていくだろう。

34名の取り組みを授業中に全てカバーすることは難しい。そこで活用しているのが「振り返りカード」だ。3年間のCAN-DOリストを載せたカードの半面には、単元の目標を示したReflection Sheetを積み重ねる。「何ができればよいか」を共有するだけでなく、生徒のつぶやきを拾うことも目的だ。よい振り返りは全体で共有し、個人から全体の気づきへと変えていきたい。

また、生徒の振り返りは、教師に対するフィードバックでもある。自らの授業を振り返る材料の1つとして、今後も生徒とともに学び続けていきたい。



学習者の動機づけを高める ペア・グループ活動

志村 昭暢 (北海道教育大学准教授)

授業の中で、ペアやグループでの活動を行う際、学習者の動機づけを高めるようなものが理想であると考えられるが、どのような活動を行えばよいのだろうか。Guilloteaux and Dörnyei (2008) が授業の動機づけを高める教師の介入の程度を測定するために開発した、Motivation Orientation of Language Teaching (MOLT) の Participant structure の項目には、① Tangible reward: 活動を成功させるために具体的な報酬を与える、② Personalization: 個人の経験、感情、意見を表現させる、③ Creative / Interesting / Fantasy element: 学習者の関心・価値などに関連し、好奇心を刺激する、④ Intellectual challenge: 論理的思考を要する活動 (パズル、発見学習など)、⑤ Tangible task product: ポスターやパンフレットづくりなど、具体的な成果に向けた活動、⑥ Individual competition: 個別に競い合う要素を含む活動、⑦ Team competition: ペアまたはグループで競い合う要素を含む活動、という7つの Activity Design がある。これらの項目に対する配当時間が長くなると、より学習者の動機づけを高める要素を含んだ活動ということになる。

文部科学省の *Hi, friends!* には、Personalization や Creative / Interesting / Fantasy element, Intellectual challenge, Tangible task product などの要素を含んだ活動が見られるが、中学校の教科書を見ると、その割合があまり高くないような印象がある。

中学校でペアやグループでの活動を行う際、何かと文法や語彙の定着を目的とした活動になりがちであるが、MOLT の7つの Activity Design の要素を加えることで、より学習者の動機づけを高める活動にすることが可能ではないだろうか。

参考文献

Guilloteaux, M. J., & Dörnyei, Z. (2008). Motivating Language Learners: A Classroom-Oriented Investigation of the Effects of Motivational Strategies on Student Motivation. *TESOL Quarterly*, 42, 55-77.

「スパイラル学習ワークシート」 はすごく力になります!



北原 延晃 (東京都港区立赤坂中学校主任教諭)

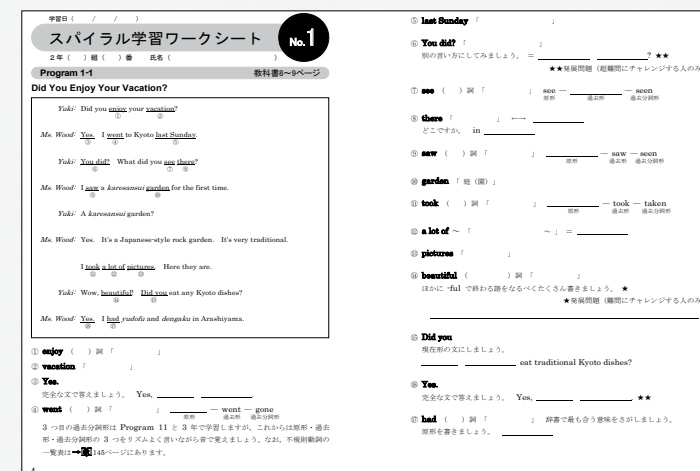
40代までずっと毎学期末に「楽しかった活動」「力がついた活動」の2本軸で生徒に授業アンケートを取ってきた。「力がついた活動」でいちばん長く支持されたのが *SUNSHINE* の指導書にある「スパイラル学習ワークシート」(以下SW)のもととなった English Express である。これは新しい課(セクション)の中に現れる既習語句、既習文法のおさらいをするためのプリントである。新しい課に入る前にスタートラインをそろえておこうという意図から始めた。

- ①生徒は教科書の新しい課に入る前にSWを宿題として家でやってくる。辞書や教科書を見てもできない問題はやらなくてよい。
- ②教科書本文の内容理解に入る前に答え合わせをする。「1人が最低1回は手を挙げて答えよう」と促す。同時に複数の生徒が挙手をしたら、英語の苦手な生徒から指名する。
- ③中には★がついた難問も含まれている。それについては英語が得意な生徒を指名する。こうして、英語が得意な生徒も伸ばすことができる。
- ④基本的には答えは板書せず、テンポよく進める。3～5分で終わるように。
- ⑤正確なつづりを気にする生徒には、後ほど教師が正解プリントを掲示すればよい。
- ⑥不規則動詞の活用は全員で声をそろえてテンポよく言う。
- ⑦SWは復習の活動なので評価には入れない。

以下は本稿のタイトル同様に昨春の卒業生の声の一部である。

「出された日に終わるようにする」「やっておけば予習になり計画的な行動力がつく」「わからないところがあってもすぐにとばすのではなく、教科書や辞書を使ってなるべく自力で解く」「宿題でおさ

らいをしておかないと頭に定着しないのでやらなきゃダメ!」「英語は宿題を正しく意欲を持ってすれば、いちばん得点上がる教科だと思う」



▲「スパイラル学習ワークシート」2年 pp.4-5

緊急避難所での国際貢献

島谷 浩 (熊本大学教育学部教授・熊本大学教育学部附属中学校校長)

4月14日、16日に発生した「平成28年熊本地震」の際には、学校も大きな被害を受けました。熊本県教育委員会の発表によると、県内の公立小・中学校など383校、県立高校と特別支援学校57校が被災しました。また、熊本県私立中学高等学校協会は、県内の私立高校21校中20校、私立中学校は、熊本市にある9校全てで被災を報告しています。

学校での主な被害は、壁等破損、天井落下、水道・給水管破損、窓ガラス破損、玄関部隆起、プール設備損壊、体育館の天井パネル破損などでした。多くの学校で体育館や教室が使用不能になりましたが、大きな余震が続いたので家に戻れない人も多く、地震後、被災者の多くが近隣の学校などの避難所に詰めかけました。地震直後の避難者数は18万人を超えていたそうです。行政が指定した避難所だけでは被災者を収容できず、正式な避難所として指定されていない学校や民間の施設にも被災住民が押し寄せ、緊急避難所として開放されました。

私が併任で校長を務めている附属中学校でも急遽4教室を開放し、緊急避難所として近隣の被災者を受け入れました。行政側の正式な要請があったわけではありませんでしたので、まったく経験も準備もないままにスタートしたわけですが、教職員、避難してきた在校生、卒業生そして保護者・学校関係者の方々の献身的なご協力のおかげで、なんとか緊急時の地域貢献ができたと思っております。

私の勤務校である熊本大学においても緊急避難所として大学体育館が解放されたのですが、本稿では、特に外国人の被災者に対して貢献した教育学部英語科の学生たちの活動についてご報告させていただきます。

4月16日の本震後の午前中に、留学生に対応できる英語を話せる学生の協力を求める情報が、

英語科4年のLINEに流れてきたそうです。熊本大学の大学祭実行委員会を中心にした学生有志が、緊急避難所の運営を主に行っていたそうですが、外国人留学生とその家族たちへの対応に手が足りなかったようで、呼びかけに応じたAくんたち7名が緊急避難所に行くと、体育館の3分の1ほどのスペースに80名ほどの外国人が避難していたそうです。外国人の出身国は、韓国、中国、アメリカ、アフガニスタン、イタリア、インドネシア、オーストラリア、フィリピン、スペインなど19か国におよび、そのうちの2割程度は子どもでした。

地震直後は、特に正確な情報収集が大切ですが、外国人被災者のための英語情報はほとんどありませんでした。そこで、英語科の学生7名と他学部の学生2名の合計9名は、インフォメーション・デスクを開設し、ローテーションを組んで、24時間体制で交通情報、気象情報、掲示物の情報を英語に翻訳して掲示し、福岡県への避難の仕方や、煮炊きはしてよいのかというような避難所での過ごし方などについての質問に対応しました。

情報不足で困っていた外国人被災者にとって、学生たちの活動は非常に大きな助けになったことでしょう。また、学生たちは、困っていた外国の方々の役に立てたことで強い自己有用感を感じていたことでしょう。避難されていたある外国人女性の方から“I'm proud of you.”と言っていたとき、とても感激したとAくんは言っていました。英語を学んでいてよかったとこれほど感じたことはなかったそうです。

グローバル時代に対応できる「仕事で使える英語力」の獲得を目指そうと言っても、自分には関係ないと言う人が多いかもしれません。しかし、「困っている人を助けられる英語力」であれば、誰もが身につけたいと思うのではないのでしょうか。